

## 「カタイモンになっとられ」

立山町天林 鈴木 輝馬

私もとうとう77歳になった。現代では珍しい事でもないが、戦争世代の私とすれば多少の感慨も沸く。

大正7年生まれ、いわゆる昭和13年兵として、小学校の同級生の男子はひとり残らず兵隊にされ、3分の1が戦死した。

私は生き残れたが、同級の中では一番長く中国戦場、満州開拓団、シベリヤ抑留と通算10年間も外地で過ごした。

「老人になった時、思い出を多く持っている者は幸せだ」という話があるが、私の場合も全くその通りで、決して楽ではなかった10年間も今はなんの恨みも悔いもなく楽しかった思い出だけが残っている。有り難い事に、それを共感して語り合える二人の親友までいる。一人は戦場の友、一人はシベリヤの友と言う具合である。3人ともお互いに病気を抱えているが、それぞれ気づかってくれる家族にも恵まれ、若くして戦死した多くの戦友の身の上に思いを馳せている。戦死した人達とくらべれば、私は今しあわせ一杯である。

しかし、幸せは只でやって来た訳ではない。それなりの苦があったればこそである。

昭和23年11月、やっと帰還の順番が廻ってきて、バイカル湖畔のイルクーツクからナホトカに向かう貨車の中で「食べ物で随分苦しめられたから、日本に帰ったら父親から田んぼの14～15枚も分けてもらって百姓をしよう」と夢見てきた。生家は大地主で、小作米を原料にして小さな作り酒屋を営んでいる筈だっ

た。

ナホトカの気遣いじみた民主運動にはドギモを抜かれたが、そこは融通無碍、我慢づよい特性を発揮して「そうだ、そうだ、スターリン大元帥閣下万歳、我等が祖国ソビエト同盟万歳」と付和雷同して見せて、何とか通り抜けて、故郷に帰ってみたら、農地解放が終わってしまっていて生家は没落していた。

小作米が無くなったから作り酒屋も休業状態、次男の私に分ける田んぼなんか何処にも残っていなかった。父は「お前が生きて帰るとは思っていなかった」と言った。ヒドイ。

しかし、ま、戦場とシベリヤに7年も居たのだから、生きて帰れと願う方が無理だったのかも知れない。

私はそんな事で落胆するほどナイーブになって居られなかった。敗戦の前年に満州に連れて行った妻も、私に劣らぬ苦難をくぐり抜けて帰っていた。妻も鍛えられていた。

私の農業への執念は強かった。それほど食料不足の悲惨さが身に染みて居たのだ。

当時簡単に土地が手に入る方法があった。引き揚げ者、戦災者を対象にした開拓団である。標高250メートルの山林原野だったが、私たちは前途に待ち受けている苦難も考えずに、何のためらいもなく開拓団に飛び込んだ。

待ち受けていた苦難は捕虜生活よりも辛かった。最初のジャガイモが採れるまでは飢え死にしそうだった。捕虜と違って、今度は家族が

ある。妻の両親も私の親たちも開拓には大反対だった。捕虜になってオメオメ生き帰って、その上食い詰め者の開拓者になるなんて一族の恥だと言う訳である。敗戦になっても極限の状態を体験していない人達は、明治、大正時代の偏見が取り去られていなかった。

従って何処からも援助が受けられなかったが、敗戦後の満州シベリヤで国家から見捨てられてさえ生き残ってきた者たちだ。

今更親から見放されてもビクともするものではなかった。苦難には慣れていた。団員達は皆夢と希望に燃えて熱気に溢れていた。

だが、希望に燃えていたのは男たちだけで妻たちは必ずしも全員、熱気に溢れていた訳ではなかった。

半分土間の小さな家を作り、井戸を掘り、囲炉裏を作った。燃料は開墾の副産物の木の根っこ。買うものと言えば配給の米とランプの灯油だけ。5,000円もあれば、2カ月くらいは安心して開墾と営農に専念できた。

政府もうまく政策を立てていて、一反歩開墾すれば5,000円ほど助成金が出た。勿論能力を上げれば、それだけ余計に金が貰えたが、鎌と鍬だけの人力では一人でそんなにやれるものではない。いきおい最低生活を続けざるを得ない。

妻たちは不満だったが、当時の亭主の権威は絶大だった。その代わり亭主の責任もまた無限大である。

なんとか金を儲けなければと、薦められるままに畜産に取り組んだ。だが、これは後になってからやっと悟ったが、人間の食べ物さえろくに持っていないのに、その上家畜にも喰わせるなんて、初めからドダイ無理な話だったのだ。肉牛もやり豚も鶏もやったが、結局餌代を払ったら何も残らなかった。相手は動物、人間の計画通りには行かなかった。

しかし沢山の堆肥が残って野菜を作って売れるようになった。新墾地の野菜は病虫害も少なくともとても味が良かった。特に西瓜とジャ

ガイ薯は抜群だった。米しか作った事がない地元の農家の人達には、薪しか取れないと思っていた山の上に立派な葱や結球白菜、トマトまで出来るとは驚きだったのか、よく買ってくれた。一番の思い出は、妻と二人でトマトを4千株作った事だ。しかし残念ながら半分収穫した所で台風に会い全滅したが、野菜作りに自信を付けるには十分だった。

ところが、米増産の掛け声とともに国の開田計画が進められ、畑は全部ブルドーザーでひっくり返され水田の形に造成された。水田の形は出来たが、水の問題が中々解決しなかった。おまけに借金がいちどに膨らんだ。

採算の取れない畜産でやっと肥やした畑が無くなり水田にもならない。粘土ばかりの畑からは何も取れなかった。

開拓を始めてから10年経っていた。子供たちも小学校に上がり現金が必要だった。

切羽詰まったとき神の助けか、近くで大きな用水工事が始まった。男も女もみんな土方に出た。こんな辺鄙な所まで来て土方で喰わねばならないなんて不本意だったが仕方ない。

それから7年目にやっと水利権問題が解決して用水に水が入ってきた。

水田農家の娘だった妻たちの喜びようと言ったら大変なものだった。「これで米を買う心配はない。腹一杯食べられる」と、これまで夫の計画に従って渋い顔して鍬を持っていたのが反対に夫たちをリードするようになった。渋い顔していた農協さんも大いに見直してくれ、コメの威力に改めて驚いた。

NHKから「17年目に米が穫れるようになった開拓者たちの喜び」と言うタイトルで取材に来て、放送の日、村の生産組合長だった私は、妻と一緒にスタジオに呼ばれて、晴れがましくも全国放送のスタジオ102に出してもらった。この事によって妻の実家の方でも私の生家でもやっと認めてくれた。

しかし一番認めて欲しかった父は既に亡く

なっていた。父の感想が聞きたかった。

そしてこの頃が米の最後の花道になった。

学校給食でパンや麺類に慣れた日本の若者たちが米のご飯に執着しないようになり、米の消費量は年々減少していったのだ。毎年の値上げ陳情にもかかわらず、政府買入れ価格は頭打ちになり、早場米奨励金も打ち切られ、減反政策までとられる様になった。

身を削る様な思いで水田を造成したのはいったい何だったのか、バカバカしくなった。

そこにまき起こったのが日本列島改造論による土地ブーム。山の中の開拓地にも買い手が現れた。それまでの評価額の十倍だった。

私は畑作には物凄く熱意を持っていたが、コメ作りはあまり好きでなかった。妻の大反対を押し切って、長男と次男の宅地だけ残してきれいさっぱりと売り払った。

息子たちは結婚適齢期になっていたが、結婚式の費用には何の心配もなかった。

次男の方が先に恋愛結婚して、向いに家を建てた。私は内心うまくやったと思って居たのだが、結果は大凶と出た。私よりずっと健康だった妻がガンで急死してしまったのだ。

48才だった。医者に行った時は既に手遅れで、手術してから1ヶ月半の命だった。

苦労話はここまで。誰だって他人の苦労話なんか聞きたくはない。

田んぼを売った金の一部で近くで山林を3ヘクタール買ってあった。仏壇を買い、墓を建て、長男に嫁を買ったら金は無くなった。

長男の嫁は不思議な縁で京都から来てくれた。昭和51年だった。「田んぼが無いから来る気になった」と言う。若者たちに農業の未来に魅力が無くなっていた。

農業高校を出た長男も百姓をする気は全然無く、さっさとサラリーマンになった。

私は正直に「金は全部使ってしまったから後はよろしく頼む」と言って、山で本格的な椎茸栽培と、杉の植林に励んだ。

嫁はしっかり者で、勤めの傍ら、生椎茸の

パックや市場に運ぶのに協力してくれた。

椎茸の原木の菌打ちや、春の杉苗の雪起こしまで手伝ってくれた。私はお返しに毎日薪で風呂を沸かした。

山は楽しかった。同じ山林を切り開く仕事でも、若い時の開拓団時代とは比べ物にならない。切り開かれた跡地からは、今まで雑木に押さえられていたワラビ、ウド、タケノコなどの山菜がいっぱい出た。大評判になり、親戚、友人たちやそうでない人達もよく取りに来た。そして私の仕事がロマンチックだと羨むのだった。椎茸は老人の道楽にしては良い収入になり、手入れの行き届いた杉苗は暖冬が続いたせいで面白いように伸びる。静かな日には、カモシカやムササビ、リス、時には熊までが様子を見に来る。クマガイ草、岩カガミ、笹ユリ、山ツツジ、山椿などが彩りを添える。栗拾いは熊や鼠との競争だ。そして秋には又来年の椎茸の原木の伐採、運搬。

昔と違って機械が発達しているから楽なわりには能率が上がる。そして午後は早めに仕事を切り上げて家に帰り、五衛門風呂を沸かす。沸かしながら自家菜園の手入れ。

極楽みたいな日々が続いていたが、昭和55年の12月、急にご飯が食べられなくなり、診察を受けたら胃ガンになっていた。

良い先生に恵まれた。看護婦さんは「よい先生の担当になって良かったね」と言った。

おかげで15年間再発はない。長男夫婦は56豪雪の冬だったのに、よく頑張って看病してくれた。

同室の患者のひとりが「アレあんなの娘さんか?」と聞いた。「いや、息子の嫁だ」。「良くやるからあんなの娘さんかと思った。あの人に妹さんは居ないのか?」「残念だがひとり娘です」「妹さんが居ればうちの息子の嫁に欲しいと思った」。そんな話が出る程付き切りで甲斐甲斐しく看病してくれた。私も改めて感謝した。おかげで1カ月あまりで退院して、地元の医者にかかれる程になって

半年経たないうちに又山仕事が出来るようになった。杉は早く植えたのは直径20～30センチになり、下から4メートルまで枝を払った。極楽浄土が又戻ったかに見えた。

赤マムシが沢山居たが、極楽のマムシは私を一度も噛んだ事はない。反対にチェンソーに2度ほど噛まれたが、大した事にはならなかった。昔の小鳥山の網場の跡だった。何万羽何十万羽の小鳥が命を落とした場所だ。

私は嫁が用意してくれたローソクと線香とお花を持って行って弔った。

しかし地上の楽園は10年あまりで終わりを告げた。こんどは脳梗塞になったのだ。

初めは「いよいよ廃人か？」と思ったが、間もなくつかまり歩きが出来ようになって退院したが、さすがに山仕事も風呂の薪割りも出来なくなった。

その年の暮れに嫁が「お父さん、この冬病院に入っておられ、その間に家を建て替えるから」と言った。私に否やはなかった。

風呂の薪切りとくみ取りトイレの始末が出来なくなったからだ。

近くの町の老人病院に入り、真剣にリハビリに励んだ。どうしても一人で歩けるようになって、又山を見守り野菜が作りたかった。

半年ほどして退院して来たら、家は立派に新築されていた。

西向きながら明るい私専用の部屋もある。そして何より驚いたのはトイレと風呂場で日進月歩の建築様式の進歩には目を見張るばかりだった。私の部屋のすぐ近くにトイレがあるのも有り難かった。慣れるまで暫くは、何か旅館に泊まっているような、また下宿させて貰っている様な気分だった。

今までの様に畳に焼け焦げを作ったり、柱や壁に傷をつけたり、釘を打つなんかとんでもない。「これは私の家ではない。息子たちの家だ」と納得出来た頃には、親父の権威は地に落ちていた。

結構な事ではないか。息子たちも、もう40

才近い。働き盛りだ。飯はちゃんと食べさせてくれるし洗濯もしてくれる。老いては子に従え、今更老人が何を言う必要がある。だいいち今となっては、息子たちに誇れるものは何も持っていない。山林も初めから2人の息子の名前で登記してある。

ここは正直にバンザイしたほうが勝ちだ。軍人恩給も復活され、支給額も年々上がって小遣いにも不自由しない。私はせめてものお祝いにと電子レンジを買ってあげた。

半年のリハビリの効果で杖をつきながらも1000メートルくらいは歩けるようになった。私は改めて息子たちの信頼と尊敬を取り戻す為に、自分自身の値打ちを上げる努力をする決心をした。漢字試験に挑戦する事にしたのだ。目さえ覚えていれば漢字の書き取りの練習を続けて、1級、初段、2段と何とか一度でパスした。そして三段は大変だった。国語辞典に載っている漢字を全部記憶して試験に臨んだ。試験が行われる女子高校はヤトラ階段が多い。私は元気そうな老人に手を引いて貰って教室に入った。私はパスしたが、手を引いてくれた人はベケだった。

嫁は合格証書を入れる額縁を買ってきて、仏間の鴨居に上げた。ちょっとばかり信頼を取り戻せたが、尊敬迄は程遠い。調子に乗って4段に挑戦してみたが、全然歯が立たなかった。2回受けたが、惨敗だった。

私は杖をついて畑に行き、休み休みながら鍬が使える様になって、念願の野菜作りが出来ようになり、今では夏野菜、秋冬野菜は次男の家族の分も含めて殆ど自給出来る。

誰も「有り難う」とは言わないが、黙って食べてくれるだけで満足だ。目下、腹を立てない修行中で、これも大事な訓練科目だ。

私は京都の女性は優しくしてナヨナヨしているのかと思っていたが、とんでもない思い違いだった。うちの嫁は実にしっかりしているし、経済にも強い。気も強いが実に頼りがいがある。その上仏壇とお墓を大事する。墓は

自分で建てたし、今は何の不安もない。

死ぬことの不安？「そんなもの全然無い」と言うのは嘘だが、年取ったら誰でも死ぬのは当たり前だし、年取らなくても死ぬ人だって居る。みんな黙って死んでゆくところを見ると、案外楽に死ぬのじゃないかな？

何も自分だけが特別の死を迎える訳じゃないし、勿体ぶる事はない。寿命に従えばよい。でも、こんなに老人たちが手厚く優遇されている娑婆だ。今生き残っている老人たちは若いときに苦労したかも知れぬが、今はまるで天に昇ってしまったみたいだ。老人病院のベッドに寝転がってはいは勿体ない「頑張るって起き上がろう」と言っても、無理か？

夏涼しいし、冬暖かいし、家に帰っても何もする事がないし、此处がいいと、ついすみか決めて居る人も居る。主観の問題だ。わがままかも知れぬが、私は優しい息子たちと嫁たちに見守られて家で死にたい。

どっちにしても初めて死ぬのだから、そんなに旨く行くかどうか、死んで見なければ分からない。

そんな私の事よりも、息子夫婦の事の方がよけいに心配だ。私が居なくても野菜を作って食べてくれるだろうか。孫たちはハンバーガー世代だから、どうしようもないが、息子たちはまだそこまでは行っていない。

今はまだ外国から野菜がたくさん入ってくるから良いが、この先、この状態がいつまでも続くとはとても考えられない。

私が「野菜作りのノウハウを書いて置こうか」と言ったら嫁が「そりゃ書いて置いて欲しい」と言ったから、百坪の畑にこれまで作った全部の種類を蘊蓄を傾けて書いた。

また畑の端の木陰になる所には手間の要らない茗荷、アスパラ、山からゼンマイの株も掘ってきて植え、ウドは前から植えてある。

これで一安心と思ったら、思わぬハブニング。今まで来た事がない山猿の群れが来るようになった。サツマイモもトウモロコシも、

西瓜もメロンも殆ど収穫なし。こんな事は初めてだ。シベリヤ仲間の親友に言ったら「稲の育苗ハウスの古いのがあるから持って行ってやろう」と言う事になった。ヨシ試して見よう。そんな事言って、そのからだで出来るのか？と言われるかも知れぬが「明日ハルマゲドンが来ようとも、私は今日葡萄を植える」と西洋の古い諺にあるではないか。畑で倒れたら、戦場仲間の親友は「名誉の戦死だ」と言ってくれるに違いない。

こんな私に、このあいだ飛び上がるほど嬉しい事があった。

私は一週に一度、近くの町の病院に通っているのだが、病院の送迎バスは山の上の村までは来てくれない。バスの所まで2,000メートルある。私には無理だ。仕方なく私はチャンスさえあれば誰にでも頼んで乗せて貰った。

それを見て嫁が「お父さん電気自動車買って上げるから、あんまり人に迷惑かけられるな」と言ったのだ。私はびっくりして「そ、そんな高いもの、いいよ、実は金なら少し貯めているんだ」と言ったら息子が「なんだ、自分で買う積もりだったのか」「うん、欲しいと思って金を貯めてみたのだけれど、考えて見たら、いつ何どき入院せんらんかも知れんし、いつ何時葬式にならんとも限らん、と思ってためらって居たのだ」。すると嫁が言った「前の家の建物共済の払い戻しを定期にしてあるから、お金を出してあげる。お父さんのお金お父さん持っておられ」「そうか、済まん、有り難う」と、私は頭を下げた。

次の日嫁は会社から帰ってくるなり「注文してきたよ、2、3日中に持ってくるから、お父さん家にいてくれって。よく説明したいからって」と言った。私は楽しみにして待っていたが、3日目は病院に行く日だった。

もしかしたら、留守中に持ってきてるのじゃないかと、ハイヤーで帰って来たら、やっぱり持ってきて待っていた。

ハイヤーの運転手は「あれ、あんたの？」

と聞いた。「うん、うちの若い衆が買ってくれた」。運転手は複雑な顔をした。

2人来ていたが、若いほうが説明した。始動、前進後退、スピード、方向指示と説明して、ちょっと試運転させた。

昔オートバイに乗っていた私は直ちに理解した。「すべてバッテリーが原動力だから、使ったら必ず充電しておくこと。バッテリー液のレベルは時々確認すること」。私はその通りに復誦した。「じゃ、気をつけて」と帰っ

て行った。

次の日嫁は「お金払ってきたよ。賢い爺ちゃんだねと褒められた」と、自分が褒められた様に喜んでくれた。

ある日帰りに農協に寄ったら「あれー、爺ちゃん、ええがに乗るとるぜー」と声をかけられた。見たことのない婆ちゃんだった。「うんカタイモンになっとったら、あんねが買うてくれた。」「あれ、ええあねはんやー」と、今度は嫁が褒められた。